

書評 「スイッチ・オンの生き方」

村上和雄・著 致知出版社

「この本は、いわば私の 50 年の遺伝子研究の総決算書であり、また新たな挑戦への決意書とも言えます」

遺伝子工学の大家である著者は本書に対する熱い思いをそう記す。

私たち人間は、一ページ千文字で千ページもある大百科辞典の三千二百冊にも匹敵するほど膨大な遺伝子情報（ゲノム）を持っているという。著者はその遺伝子の 98 パーセントはスイッチ・オフの眠った状態にあり、それらを目覚めさせることで人生が変わると指摘。よい遺伝子のスイッチを数多くオンするにはどうすればよいのか。本書には著者が 50 年かけて擱んだ「遺伝子スイッチ・オン」の生き方が短い言葉で、ギュッと凝縮して紹介されている。



例えば、「火事場の馬鹿力」という言葉がある。火事場では力の弱い女性やお年寄りでも普通では考えられない重い荷物を持ち上げる力が湧いてくるという譬であるが、これなどまさに火事という環境の変化が眠っていた遺伝子を瞬時に目覚めさせ、莫大なエネルギーを生み出したことを表していると解説する。



さらに人間という存在を 遺伝子レベルで比べれば、ノーベル賞を取るような天才も一般人も 99・5 パーセント同じであり、その差は心のありようや環境によって生じるという。

世の中には奇跡といわれるような出来事が起きる時がある。よい遺伝子のスイッチをオンできれば、だれもが奇跡の人となれる可能性を秘めていることを本書は教えてくれる。

